言葉を知ることで見えてくるもの
～日本理化学工業、大山泰弘会長に聞く　前篇～

日本理化学工業株式会社

ライター　上村雅代

日本理化学工業株式会社は、昭和 12 年創業のチョークメーカーの老舗です。同年に開発された日本で最初の衛生無害な炭酸カルシウム製チョーク「ダストレスチョーク」をはじめ、ガラスや鏡などに書け、濡れた布で消せる「キットパス」など、広く愛されている製品を作っています。また、同社は 1975 年、川崎市に日本初の知的障がい者多数雇用モデル工場を開設し、その雇用割合は 7 割を超えています。障がい者雇用を積極的に推し進めてきた、会長の大山泰弘さんにお話を伺いました。

大山　泰弘 会長

「私の歩みは、知的障がい者が歩ませてくれた道なんです」

あるとき、養護学校の先生が訪ねてきて、生徒を就職させて欲しいと頼まれました。最初は「とんでもない」と断ったそうですが、またやって来る。そして３度目にやって来たときに、「分かりました、もう就職させてくれとは申しません。彼らは就職できないと、施設に入ってしまうんです。働くことを知らずに人生を終えてしまいます。どうか、何日でもいいから働く経験をさせてやってください」とお話しされました。それがきっかけで、知的障がい者２名の２週間の就業体験を受け入れたと言います。

ところが、就業体験を終えるころになると、従業員たちが「私たちが面倒を見ますから、来ていいって言ってくださいよ」と言う。そうした従業員たちに背中を押され、翌年、その２名が入社しました。

材料の計量は、容器の色と同じ色のおもりをのせるように工夫

その数年後、当時は専務だった会長は禅宗のお坊さんに尋ねました。「うちの会社には数名の知的障がい者が働いています。施設で生活すればもっと楽に暮らせるのに、どうして彼らは一生懸命働くのでしょうか？」

するとお坊さんは次のようにおっしゃいました。「人間の幸せは、人に面倒を見てもらって楽に生きることではない。人間の究極の幸せは、人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人から必要とされることだ」

深く納得した会長は、それ以後、一人でも多くの障がい者が働ける場にしようと決意し、重度障害者多数雇用モデル工場を作り、彼らだけでほぼ全ての作業ができるよう、業務内容に工夫を凝らします。

たとえばチョークの原材料に関しては、入れ物の蓋の色と錘（おもり）の色を同じにすることで、材料の名前が読めなくても、何グラムの錘なのか分からなくても作業できますし、何分混ぜるのか分からなければ砂時計を用意して、砂が落ちるまで、とすればできるのです。

「どんな人にも才能があり、役に立てることが嬉しいから毎日やっている。役に立てるように、周りが支えてあげればいいんです。一人ひとりが一生懸命働くことのできる環境さえあれば、皆、どんどん技術を向上させていけるんです。社会の対応をそういう風にすればいい」

日本理化学工業　社員の皆さん

人間の幸せを世に示すために、「私は言葉、文字で人を説得できるということを知ったんです」と会長。

たとえば「福祉」の本当の意味。

「福」の「しめすへん」は神様が人間を幸せにする恵み、つくりは口に入ることから、食べ物に困らない生活の恵み。「祉」のつくりは、心に止まって心を幸せにする恵みという意味。つまり、物心両面を幸せにすることが福祉なのです。特に重度の障がいのある方は「人の役に立つ環境においてこそ成長する」。企業内で張り合いのある雰囲気・環境で毎日幸せを感じながら人の役に立って、彼らを成長させることが必要です。

また「働」という字は日本でつくられた国字です。

「働くという字は、人のために動くと書きますが、これは、人のために動くことが自分自身の幸せにも繋がるという意味でつくられたとも言われています」と会長。

大山会長にお話を伺い、改めて日本語の奥深さ、素晴らしさに気付くことができました。

上村雅代（かみむら　まさよ）　プロフィール
ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災　欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊（共同通信社）共著。
現在、息子の育児奮闘中。最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオを担当する等活躍中。